2017 年度社会構築論系
地域・都市論ゼミ２　ゼミ論文

地域をつなぐ祭の役割

―高円寺阿波おどりを事例に―

主査　浦野正樹教授

早稲田大学　文化構想学部　社会構築論系 4 年
浦野ゼミナール所属

1T140369-1
木村　友梨恵

目次

序章
序－１　問題意識…… 3
序－２　研究対象地の選定…… 3
序－３　調査方法…… 4
序－４　論文構成…… 4

第１章　地域社会の形成と祭
１－１　地域社会における祭の役割の変化…… 5
１－２　祭の構成要素…… 6

第２章　内から見る高円寺阿波おどり
２－１　高円寺阿波おどりの概要…… 9
２－２　高円寺阿波おどりの歴史と現在……10

第３章　外へ広がる高円寺阿波おどり
３－１　高円寺阿波おどりから広がるつながり……17
３－２　高円寺阿波おどりの発展要因……21

第４章　高円寺における阿波おどりの役割
４－１　まちのアイデンティティ……27
４－２　ネットワークの構築……28

終章
終－１　総括……31
終－２　謝辞……33

参考文献／URL ……34

序章

序－１　問題意識

地域コミュニティの希薄化が言われて久しい。実際に、私の地元である茨城県那珂市のとある地区の子ども会は消滅してしまった。私自身、幼い頃に子ども会の活動に参加していたこともあって、消滅を聞いた時はとても衝撃的であった。その理由としては、子どもの数が減っているからかと思ったが、それよりも保護者の中で子ども会の運営に関わりたくない人が増えているからだと知った。地域の中で、子どもを中心に様々な年代の人と交流できる活動が多かっただけに、コミュニティが失われてしまったことは非常に残念である。小学生の頃は毎年夏になると、3 年に 1 度の地域の祭に向けて、神社に集まって太鼓の練習をしていた。地域の大人たちに教わり、一緒に祭をつくりあげていく中で、一体感や地元への愛着を感じていた。こうした地域行事を通してのコミュニティは、日常的なコミュニティにはつながっていかないのだろうか。共同の意識は生まれないのか。

このように、地元のコミュニティの消滅を受けて、日常的なコミュニティ形成において地域行事が果たす役割を考えてみたい。地域行事は地域の中でどのような役割を担っているのか。地域や住民にどのような影響をもたらしているのか。また、コミュニティに関わりたくない人も増える中で、どのような担い手が活動しているのか。地域行事として誕生した背景や、これまでのまちの歴史とともに移り変わってきた様子を、コミュニティの観点から探っていきたい。

一番の関心は、祭（非日常）におけるコミュニティと地域（日常）のコミュニティは同じなのか、ということである。相互に影響しあっているのか否か、あるいは、全く別のものなのか。時代の変化に伴い変化はあったのか、どのような変化を遂げたのか。どのような形でコミュニティが存在しているのかを明らかにしたい。その上で、研究対象とする高円寺の今後の展望と、他の地域にも生かせるような視点を考察していく。

序－２　研究対象地の選定

研究対象地は高円寺とする。高円寺阿波おどりを中心に、高円寺のまちの変遷を追う。高円寺を選んだ理由としては、①1957 年に始まり、今年で 61 回目となる伝統ある祭であること、②高円寺パル商店街振興組合の青年部が祭りを立ち上げ、現在までに東京高円寺阿波おどり実行委員会や NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会が誕生し、住民の手で大きくしていった祭であること、が挙げられる。祭を通じて地域にどのような効果を与えているのか、伝統ある高円寺阿波おどりを事例に、高円寺のコミュニティに注目しながら考察する。研究

する範囲としては、高円寺の全域、及び杉並区の中の高円寺という観点から見ていく。

序－３　調査方法

まず、地域社会の形成と祭との関係については文献調査を行った。地域の祭に焦点を当て都市祝祭を研究する松平誠、共同性から都市祭礼を研究する田中重好の著作を中心に、地域と祭に関して考える枠組みを得る。

次に、高円寺のコミュニティに関して、高円寺阿波おどりを中心に、文献とヒアリングによる調査からまとめる。ヒアリングの対象は、NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会（専務理事・事務局長　冨澤武幸氏）である。さらに、高円寺阿波おどり連協会、高円寺パル商店街、杉並区については、ホームページより資料を収集した。

序－４　論文構成

まず、１章では、地域社会の形成における祭の役割を考える。地域社会が形成され成熟していく過程において、祭が果たす役割とは何かを考えていく。歴史の中での祭の役割の変化と構成要素を考察し、祭と地域の関係を分析していく枠組みとする。

次に、２章では、高円寺阿波おどりの歴史と現状を探る。高円寺阿波おどりが地域行事として誕生した背景や、これまでのまちの歴史とともに移り変わってきた様子を探り、日常性と非日常性に注目しながら現状を分析する。

続いて３章では、外部へと広がる高円寺阿波おどりを見ていく。様々なつながりを広げていく過程を追い、その発展要因を現代都市の性格と絡めながら検討する。

そして４章では、日常性と非日常性の相互の転換の様子から、高円寺における阿波おどりの役割について考察する。

第１章　地域社会の形成と祭

１－１　地域における祭の役割の変化

まず、時代の変化の中で祭はどのように変化してきたのだろうか。ここでは簡単な記述に留めるが、元々祭はムラ社会において豊作や繁栄を神に祈り感謝する行事であった[(1)]。

近世になると新たに都市が生まれ、ムラのように農業における「生産共同」は存在しないものの、生業の異なる商人や職人の暮らし向きに大きな差異はなく、隣近所の地縁関係が基本的な生活組織へと育っていった。さらに、時の為政者の政治は税の収奪と治安の維持に集中していたことから、都市民衆の具体的な生活実態には積極的に干渉しなかった。その結果、民衆は災害対策や防犯、教育、冠婚葬祭、橋や道路の整備など、生活上の様々な事業を自ら行う必要があり、都市における「生活共同」が生まれていったのである。そして、都市の中の生活組織であるマチ[(2)]が最も力を入れたのは祭であった。マチは流行病の退散を共同で神に祈り防ごうとした。また、祭に財を投じて立派なものにして神を喜ばせ、盛大に流行病を追い払いたい、そのためにも外からやってくる見物人で都市を満たしたいという願望が生まれた。マチごとに用意される祭は、次第にマチ同士の競い合いになっていった。しかし実は、マチといっても税を納める限られた人々だけであり、無税の貧乏人は祭の仲間にも入れてもらえなかった。一方で、富める商人はマチの運営に大きな発言力を持ち、幕府や藩など権力とのつなぎ役を務め、威勢を振るうようになった。

現代の祭はここからさらに変化を遂げる。都市における「生活共同」の形は、明治期に入っても変わらないままであった。他方、近代的な生産様式が確立していく中で、サラリーマンや近代的労働者層など新中間層が生まれた。農村から都市へと人々は移り住み、マチの地縁的な構成とは無縁の人々が新たな生活を始めた。戦後、高度経済成長を経て、日本の都市生活は大きく変容し、生産共同や生活共同といった人々の結び目は崩れていったのである。そこでは、ムラやマチの共同のシンボルであった神の出番はほとんどなくなったが、現在でも都市で盛んに祭が行われている。京都の祇園など著名な神社の祭は、それぞれ特色を出して多くの集客を図っている。神仏とは全く関係のない祭も多く、自治体による地域住民に活力を与えるための催しや、商店街による地元の活性化を願ったイベントを行い、祭を競い合っている。

こうした祭の変化は、高度経済成長と密接に関連している。大きく分けて、都市の外部的要因と内部的要因がある。まず、外部的な要因として、経済成長による観光業の発展が挙げられる。第一次産業と呼ばれる農林水産業から第二次産業である工業・製造業へ、そして第三次産業であるサービス業へと主要産業が変化した。その中でも観光業は、観光客が訪れることによって様々な分野において経済活動が活発になり、経済波及効果が高い。こうした特

長から観光に力を入れるところが増え、発展していった。そして、祭も急速に巨大化し、華美なものとなっていく。次に、内部的な要因は、経済成長によって生活が豊かになり、都市に前述の新中間層が形成されたことにある。この都市中間層が、それまでの旧中間層に代わって、祭の中心的な担い手となった。マチのように裕福な商人だけが参加できるといった縛りはなくなり、地域住民が自由に関わることができるようになっている。この「自由な関わり」が現代ではどのようになっているのかを、次章からは具体的に解き明かしていきたい。

１－２　祭の構成要素

都市における祭の基本的構成について、田中重好による議論を参考にする[(3)]。田中（2007年）は、祭は①儀礼性、②瞠目性、③発散性の 3 つの要素を持っているとする。

①儀礼性

先にも述べたように、日本の祭は本来、神に祈り感謝する行事である。神を迎え、もてなし、送る、という一連の儀礼から構成されるものであった。所作や服装が予め決まっており、長い間守られてきた祭は、一連の儀礼の体系と考えられる。

そもそも祭の中心は「神のための祭」であり、「人間のための祭」は付け祭にすぎなかった。時代が変化するにつれ、祭の多くは「神のための祭」から「人間のための祭」に重点を移してきた。それに伴って祭の宗教的な意味が希薄化、あるいは喪失した。ただし、儀礼的な所作や服装などは存続しており、祭の参加者は理由を知らずとも約束事として従うことで儀礼を守り、祭に参加する気分を高めることにもつながっている。

②瞠目性

瞠目とは「驚きや感心で目を見張ること」であるが、都市の祭は一大スペクタクル、つまり壮大な見せ物である。ここでは見物人の存在に注目する。祭は演者と観衆の「見る－見せる」という関係が強い。農村のムラ社会における祭では見られなかったが、都市では祭を見る人と祭を行う人の分裂、あるいは祭を見るだけの観衆の発生が訪れた。都市は文化的な背景を異にする人々の集住の場であるため、都市の祭は「見る－見せる」関係を本質的に内在させており、華美な見せ物になっていく。

祭の観衆は見て楽しみ、演者は観衆を魅了させて満足感を味わう。「見る」ことと「見せる」こととは別の人々によって担われていながら、両者は瞠目性を共有している。そして、瞠目性の共有は「見る人」と「見せる人」の関係を開放的なものにしている。祭の時、人々は開放的になり、町内の家々は一般の人々に向かって開放される。御輿や山車の行列などでは観衆が祭に参加できるものも多い。この意味では、祭を見る人と見せる人とは相互に転換可能な存在と言える。祭を「見る人」と「見せる人」は分離しながらも、相補的な関係が成

り立っており、この両者が都市の祭を創り出しているのである。

③発散性

祭は非日常の時空間を創り出し、その中で人々は日常性からの解放感を味わう。人々は、日常生活の様々な規律に息詰まりそうになり、周期的に祭という非日常性を挿入して発散するのである。日常－非日常－日常という時空間の転換を創り出す装置が祭であるとも言える。ただし、非日常性への転換を促す装置は日常性の側にある。

祭の間は、特定の社会的ルールが意図的に打ち破られ、日常では禁止・禁忌されている行為が容認されることもある。例えば男性の女装など、日常では交差しない対立項が逆転したり融合したりするのである。このような過程を通して、日常では表現を許されていないような、個々人や都市社会の内側に沈殿した「負のエネルギー(4)」が姿を現し、発散される。これは反対の視点から見ると、枯渇した「生（正）のエネルギー」を充足させる過程であると言える。

祭を通して非日常世界を経過し、「生（正）のエネルギー」を充足させて日常世界へと戻っていく時に、人々は「今」「ここ」にある自分のアイデンティティを確認していく。自分の住む地域への帰属や、自分と所属集団との絆などを再確認し強化することができる。ただし、これによって自分の帰属以外の集団を排除したり差別したりする意識にもつながる。このことは個人の問題に限定されず、社会集団や地域社会にとっても同じことである。祭は地域的な統合を取り戻す装置であり、日常生活において地域統合のシンボルとして言及されるものでもある。近世における日本のマチを中心とした祭は、個人レベルではマチへの「共属の自己確認」（松平、1983 年、114 頁）であり、マチレベルではマチの「共同を誓い合う儀式」（同書、112 頁）でもあった。祭は社会の再統合の機能をもっており、個人・社会の両側から見ても、社会や集団の維持にとって必要であると言える。

また、②瞠目性とも関連するが、祭を行う人の解放感は「見せる－見る」という回路を通り、祭を見る人にも伝わって共有される。観衆も、祭の興奮や高揚感を共通に体験して発散するのである。

以上 3 つが祭の構成要素である。ここからは、これらの要素同士の組み合わせに注目して祭を考えていく。

まず、要素ごとに見ると、神社で行われるような祭では儀礼性が強固に守られている。一方、年中行事的な祭では儀礼性が希薄であり、儀礼性を継承する力も弱い。また、祭は大規模化したり観光化が進行したりすると、瞠目性が強くなっていく。最も分かりやすいのは発散性であろう。人々が祭に興奮し盛り上がれるような体験が充実している場合などは特に発散性が高くなる。

次に、組み合わせを見ていく。一般に、時代祭や七夕祭りなどのように「見せる」要素が強く、つまり瞠目性が強いほど、発散性は低い。しかしながら、ソーラン祭りなど発散性が

高い祭でも、祭の参加者の激しい動きに観衆が目を見張るように、瞠目性が高いものもある。祭が「見せる」ことに特化してしまうと、祭に参加する機会が減少し、祭への自発的な参加を促すことが難しくなる。祭の参加者ですらアルバイトに依存し、観光のための祭と化してしまうような状況がその例だ。また、儀礼性の強い祭は発散性が非常に低く、祭の硬直化を引き起こしやすい。それを防ぐために、付け祭として瞠目性や発散性の強い祭と組み合わされる場合も多い。発散性が過度に高くなると、儀礼性や瞠目性をも否定してしまい、祭を続ける社会的支持も得られなくなってしまうだろう。

このように見ていくと、祭においては 3 つの要素のうちのどれか 1 つが過剰であっては歪みが生じてしまうため、バランスよく釣り合っている状況が望ましいと考えられる。

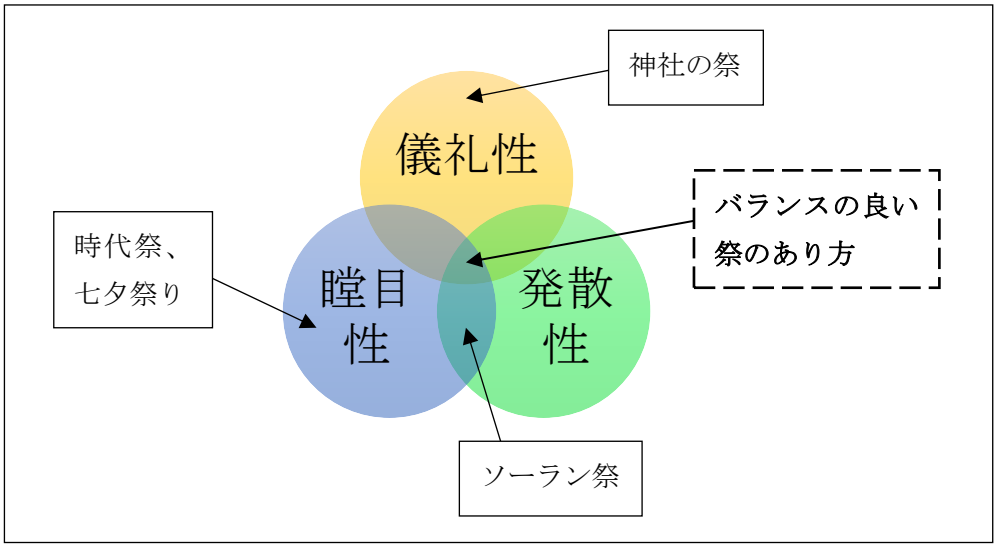


図１　祭の構成要素（筆者作成）

注

(1) 松平誠『祭のゆくえ―都市祝祭新論』(2008 年、3-24 頁）を参照した。

(2) 同書では、都市における基本の生活組織のことを「町内」（まちうち）と称しているが、本文ではムラとの対比のために「マチ」と記している。

(3) 田中重好、2007 年、73－84 頁を参考にした。

(4) ここでは省略するが、負のエネルギーの発現によって都市騒乱につながる事例がある。前産業社会期のヨーロッパの諸都市で起こった騒乱においては、人々の行動を秩序づけていたのは共同体の祭であった。例えば、1848 年のフランス二月革命における民衆蜂起はカーニバルの形式をとっていた。祭で行われる様々な象徴的な行為は、人々を日常性から引き離し、既成の秩序の解体をもたらすこともある（田中、2007 年、77-78 頁)。

第２章　内から見る高円寺阿波おどり

２－１　高円寺阿波おどりの概要

高円寺阿波おどりは 1957 年に始まり、2017 年で 61 回目となる伝統ある祭である。JR 高円寺駅付近の商店街一帯が踊りの会場となり開催される。毎年 8 月、前夜祭（ふれおどり）を含めた 3 日間で、100 万人の観客が見守る中、延べ 160 以上の連（踊り手のグループ）と、延べ 1 万人以上の踊り手が踊りを披露する。現在、高円寺を活動拠点としている連は 31 連あり、それらを束ねるのは「高円寺阿波おどり連協会」である。加盟している各連や連員間における相互の連絡をとりもち、高円寺阿波おどりの発展に尽力している。

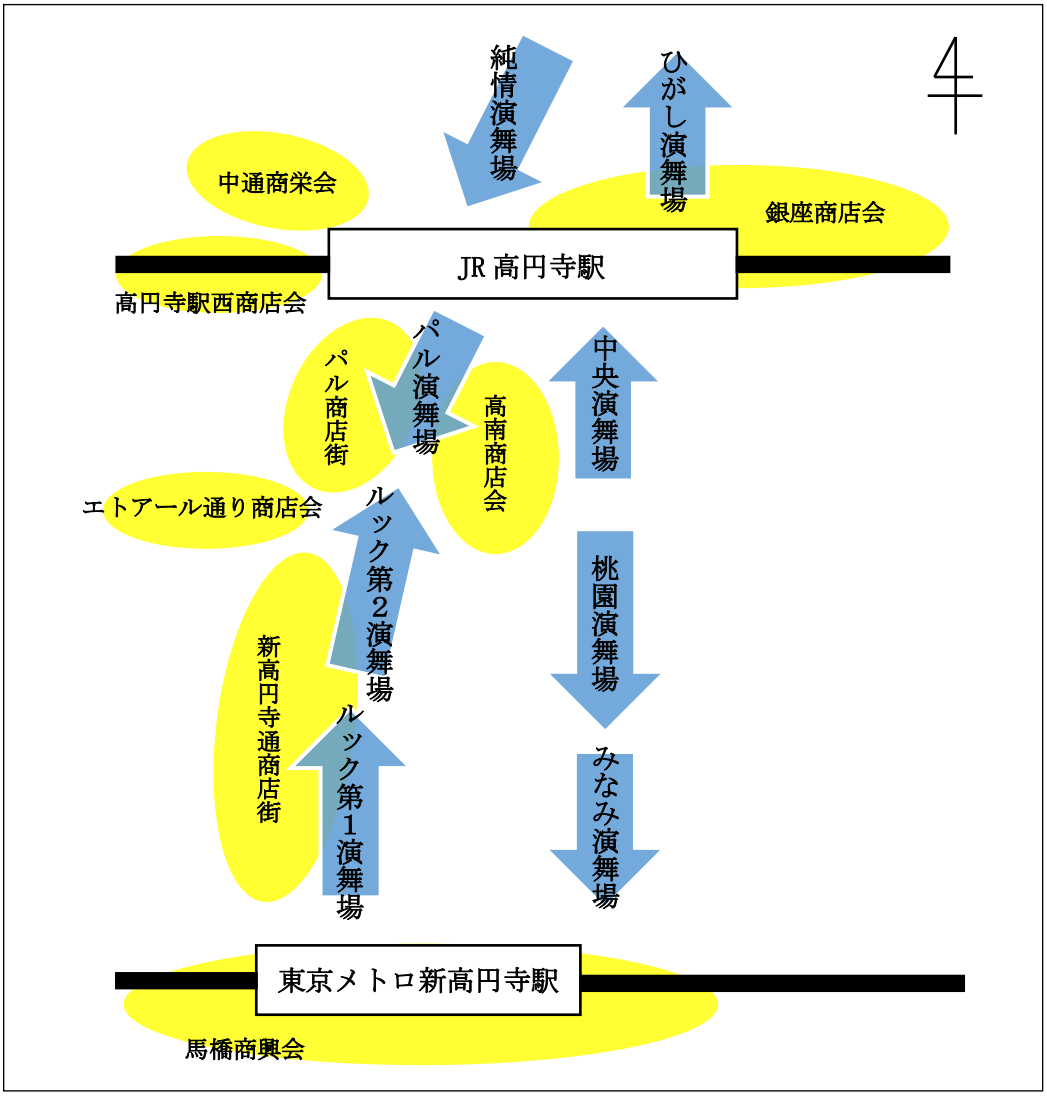


図２　高円寺駅周辺図（筆者作成）

この祭は「東京高円寺阿波おどり実行委員会」と「NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会」が主催している。また、連携している高円寺駅周辺の商店街は、高円寺パル商店街振興組合、新高円寺通商店街振興組合、高円寺銀座商店会協同組合、高円寺高南商店会、エトアール通り商店会、高円寺駅西商店会、高円寺中通商栄会、馬橋商興会である。そして高円寺駅南口の 3 商店街（パル、ルック第一、ルック第二）、北口の 2 商店街（純情、ひがし）、南口の駅前大通り（中央、桃園、みなみ）に合計 8 つの演舞場が設置されている。高円寺駅を囲むように、まち全体で祭が行われているのが図２からも見て取れる。

高円寺阿波おどりの様子（筆者撮影）

２－２　高円寺阿波おどりの歴史と現在

◆創成期

（1）高円寺阿波おどりの誕生

戦後の高円寺は、空襲によって駅前の多くが焼け野原となっており、戦災を免れた中野や阿佐ヶ谷、荻窪には引けをとっていた。また、高円寺北口駅前では住民の反対が強かったために、戦災復興土地区画整理事業が進んでいなかった。そのような状況の中、高円寺の商人は「どこよりも安く」を心がけて働き、やがては「高円寺は安い」と評判になって繁盛した。しかし、中野や阿佐ヶ谷の商店街も負けているわけにはおらず本気を出し始めると、元々高円寺よりもゆとりのあったところであったために、高円寺はかなわなくなってしまう。

1957 年 8 月、若い者の力が必要だという話になり、高円寺駅南口の高南商盛会（現在の高円寺パル商店街振興組合）に青年部が発足した。若者の力を積極的に取り入れる高円寺の風潮は、この時代から現在まで変わっていないのだろう。この当時、隣町の阿佐ヶ谷では「七夕祭り」（1954 年～）が行われており、大きな売上をもたらす呼び物であった。高円寺は同区内である隣町にはライバル意識があった。青年部では、まちの活性化と住民のレクリエーションを狙ったイベントについて話し合いを始めた。戦後 1950 年代の東京は、復興から成

長へと移り変わろうという時期で、戦前の社会に復帰するのではなく、世界の潮流に追いつこうと必死であった。そのため神社祭礼などは見向きもされず、古いと切り捨てられてしまっていた。このように、どんどん新しいものを追い求める時代の中、高円寺ではお金のかかる御輿や仮装行列などできない、坂が多くて盆踊りも大変、民謡の踊りも古臭くてそもそも踊れる広場もない。そうした中で、青年部の 1 人が突然「阿波おどりはどうだ」と言い出した。名前を聞いたことはあるものの、見たことがある人は誰 1 人としていなかった。よく知らないままに、広場も要らず、振り付けも簡単で、通りを練って歩いていくだけで面白いそうだ、一度試してみようということで阿波おどりに決まった。

こうして隣町への対抗心から、青年部誕生の記念行事として阿波おどり（当時は「高円寺ばか踊り」）が始まった。阿波おどりは青年部の「まちを盛り上げたい」という熱い思いと勢いが原点であった。高円寺は、日常の課題であるまちの活性化を目指して、非日常の祭を取り入れたのだ。

（２）開催後の危機と変化

第 1 回「高円寺ばか踊り」は 1957 年 8 月 27、28 日に開催された。本番での緊張から、踊り手 38 人は約 250 メートルのコースをわずか 5 分で駆け抜けた。

1959 年には、3 回目の開催を前に存亡の危機が訪れた。集客は増えたものの、地元の観客ばかり、祭の準備に手間がかかる、客は踊りを見るために店に背を向けてしまい商売にならないなど、商店街振興策としての当初の目論見からはかけ離れていた。そうした状況を見て、青年部は祭の存続を問う無記名投票を行った。結果、10 対 9 の 1 票差で継続が決定したのである。それ以降は、警察からの道路使用許可など、何度も危機を乗り越えながら結束を固めていった。

最初は見様見まねで始めた阿波おどりも、何度か続けていれば様になってくる。見物客も第 1 回の 1 日 2 千人から、第 5 回には 8 万人、第 6 回には 10 万人にまで増えた。そして 1961 年には本場徳島の阿波おどりとの出会いが訪れる。東京深川の徳島県人会で結成された「木場連」と知り合い、踊りの手ほどきを受けたのである。1962 年からは木場連も高円寺の祭に合同で参加するようになり、その翌年の第 7 回では正式に「高円寺阿波おどり」と名称を変更した。こうして、本物の踊りを目指す高円寺と本場徳島の交流が始まったのである。

商店街の活性化を願っていたものの、実際にスタートしてみれば、目的達成の手段であった祭それ自体がメインになっていた。青年部は当初の目的を再確認しながら、阿波おどりの発展に向けて動いていく。

◆発展期

（１）阿波おどりの拡大

当初、阿波おどりは高円寺パル商店街だけで行われていたが、次第に周りの商店街も参加

し始めた。南口のルック商店街（1965 年～）、高円寺駅南口広場（1966 年～）、中央線の高架化により南北往来の障害がなくなったことで北口の高円寺銀座商店街（現在の純情商店街）（1967 年～）、駅前大通りである高南通り（1969 年～）にまで広がり、高円寺駅南側の土地区画整理事業の進行とともに演舞場が拡大していった。

さらに、1968 年には東京都が明治 100 年記念事業として、各地の商店街振興会に活性化のための新しい催しを興すようにと指導し、警視庁の許可方針が緩和されたことも相まって、都内の各商店街でも盛んに阿波踊りが取り入れられるようになった。高円寺を地理的な核として、JR 中央線でつながる三鷹市・小金井市、東京都区部では杉並・世田谷・板橋・新宿・大田・豊島・練馬、西武新宿線沿線の都立家政・東村山市、西武池袋線沿線の中村橋、さらに埼玉県の東武東上線沿線の上福岡市、JR 京浜東北線沿線の浦和市、小田急線沿線の大和市など、東京の北・西・南郊外の私鉄各沿線に拡大していった。1970 年代後半には埼玉県や神奈川県に、1980 年代前半には山梨県大月市や静岡県裾野市、それ以降も栃木県佐野市や静岡県足柄郡開成町・浜松市などにまで展開した。

このようにして、やはり高円寺と同じく商店街振興策として、東日本の至る所に阿波おどりが広まった。その阿波おどりは、高円寺の指導によって出来上がったものが多い。連の結成や踊り・鳴り物について伝授し、それぞれの祭には高円寺からも友情出演として参加し交流している。そうして生まれた阿波おどりの結びつきは、高円寺を核として放射線状につくりあげられていった。

（２）運営体制の強化

高円寺では本場徳島の指導を受け、本物の踊りが分かり始めると、本格的に踊りを極めようとする人も出てくる。1965 年には、技術の向上を目指した踊り手が「阿波踊り留学」と称して徳島へ向かった。本物に接したことで熱は高まり、徳島のように自立した「連」をつくる動きが盛り上がって、踊りの個性を追求する独立連が次々と誕生した。

1975 年、高円寺阿波おどり連協会の前身である「連長会」が発足する。1977 年には「東京阿波おどり振興協会」（現 NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会）が発足し、業務を一元化した。1981 年になると「連長会」を発展解消し、「高円寺阿波おどり連協会」が発足した。このように、現場サイドから「東京阿波おどり振興協会」を支え、高円寺阿波おどりの発展に尽力する態勢が整えられていった。

高円寺において毎年阿波おどりが開催され、踊りは上達し演舞場は広がり、運営体制も強化されていくにつれて、もはや商店街活性化の粋を超え、技術や魅せ方を競い合う芸能へと進化していく。

◆充実期

（１）新たな側面

高円寺阿波おどりは東京の夏を彩るイベントとしてマスコミをにぎわせ、1976 年にはア

メリカ建国 200 年祭の催しに招待されて、初の海外遠征を成功させている。1991 年になると杉並区の友好都市である北海道風連町と群馬県吾妻町へ踊りの参加が始まった。1994 年には東京都とオーストラリアのニューサウスウェールズ州の友好都市提携 10 周年と、杉並区とウィロビー市の友好都市提携 4 周年を記念し、オーストラリアで踊りを披露した。

1995 年に阪神・淡路大震災が発生した際にはチャリティー阿波おどりを行い、寄せられた義援金 110 万円余りを兵庫県東京事務所に贈呈した。2011 年の東日本大震災後には救援・復興を支援する義援金活動を展開した。

阿波おどりはまちの活性化だけでなく、行政を通じての友好使節や福祉活動という側面も持ち合わせるようになっていく。

（2）NPO 法人化

阿波おどりの活動範囲は大きくなるものの、運営面ではバブル崩壊から収支が悪化していた。なかなか寄付金が集まらず収入が少ない一方で、商店街がテナント化して役員不足のためにアルバイトや業者を雇う必要があり、支出は増えていった。お金の流れや実態が把握できておらず、きちんと運営されているのか住民は疑心暗鬼になり、寄付金が減るという悪循環であった。このような状況を打開しようと、中小企業振興公社の担当者をファシリテーターに勉強会を開き、2005 年には「東京高円寺阿波おどり振興協会」（以下、振興協会）を NPO 法人化するに至った。NPO 法人は任意法人や一般社団法人とは異なり、誰でも会計資料が閲覧可能であるため、お金の流れをはっきりさせることで地域の信頼を得ることができると考えた。

また、当時はゴミや混雑が問題視されるなどトラブルが続出していた。まちのにぎわいを求める運営側に対し、静かな環境を求める町内会との間に考え方の差が生じてしまっていた。そこで、NPO 法人化することで責任を明確化し、「商店街と地元自治会」・「踊り手」・「観客」の三位一体で支えあう構造へと転換を図ったのである。地域の人には交通規制や騒音など様々な迷惑をかけてしまう。そして、地域には住民、商店街、連、交通機関、警察・消防、行政（区役所・都）など様々な意見やニーズが交錯している。そのような地域の中で阿波おどりを行うには、経済効果よりも「地元の人の満足度」が重要である。良好な住環境を維持したい居住者と、商業活動を活性化して収益を上げたい商業者[(5)]と、そのどちらも地域住民であり、両者に軸足を置いて考えていく必要がある。運営に関して地域住民に対してヒアリングを行い、問題は早く摘み取ることを意識している。

このように、阿波おどりが高円寺のまちを飛び出して拡大を続ける一方で、まちには問題が取り残されてしまっていた。そこで、日常と非日常の間に生じたズレを埋めるべく、振興協会は地域住民を第一に考えた祭を目指していく。

（3）ボランティアの協力

阿波おどりの担い手としてボランティアの存在も欠かせない。2000 年代に入ると商店街

のテナント化が進行し、地元商店街の役員やスタッフの減少が顕著になり、観客や踊り手の増加に地元だけでは対応しきれずにいた。そうした中、2006 年に阿波おどりを支えるボランティアチームが結成された。その始まりは、とある徳島県出身の大学生が高円寺阿波おどりを知って、将来は阿波おどりで地元の徳島と東京を結ぶ仕事がしたいと考え、振興協会の事務局を訪ねてきたことであった。その学生を中心に、徳島県出身の在京大学生と上智大学の環境サークルやインド教育支援サークルなどが連携し、高円寺阿波おどりを支える担い手として活動するようになった。以後さらに輪が広がり、現在では 2 日間で 400 名近い世代を超えたボランティアが参加している。

ボランティアはアルバイトではないため、振興協会としては基本的に自主性に任せている。チームが結成された直後は商店街との連携がうまくいかないことも多かったが、祭で汚くなってしまう「まちをきれいにしたい」という思いを軸に、学生たちは話し合いを続けた。結果として、踊り子の間にゴミ回収部隊を投入して祭の最中からきれいにしていく、という新たな取り組みを始めた。また、分別ステーションを設置し、分別を現金化してインド支援に充てるという活動も考え出した。

地元は異なるものの、阿波おどりという共通点から学生が高円寺にやってきた。そして、外部から高円寺に集まってきた人々が、高円寺に暮らす人々とともに、まちを良くしたいという思いを共有して祭に取り組んでいる。

（4）非日常から日常へ

現在、高円寺阿波おどりを運営する主体となっているのは、「NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会」である。振興協会の体制としては、3 ヶ月に 2 回開催される理事会と、日常的に業務を行う事務局がある。理事会は商店街や町内会の代表者 21 名で構成され、イベント等の決済を行う。事務局は 2 人で運営しており、阿波おどりを通じて日常的に高円寺から情報発信するために、イベントの企画・立案、ホームページや Facebook の更新を行っている。

今では夏の阿波おどりで 100 万人の来客があるものの、まちは飽和状態であるため、日常的に来て循環してもらうことを目標にしている。例えば、「秋の座・高円寺阿波おどり」や阿波おどり体験などがある。他にも高円寺四大祭り[(6)]として、夏の阿波おどり以外に、秋の「高円寺フェス」、冬の「高円寺演芸まつり」、春の「高円寺びっくり大道芸」があり、時期をずらして開催することで 1 年を通して集客を図っている。また、外国人をターゲットにして、高円寺が誇れる居酒屋ツアーや古着屋ファッションツアーなども企画している。

さらに、「まちなかデザインコンテスト＠高円寺」と称して、トランスボックス[(7)]に施すアートデザインのテーマに阿波おどりを設定し募集をかけている。既に 2015 年には 3 か所、2016 年には 30 ヶ所でトランスボックスにデザインが施された。落書き防止だけでなく、まちの美観向上やにぎわいの創出につなげていくために、このコンテストを行っている。まちの至る所で阿波おどりのアートを目にすることで、高円寺において「阿波おどり」がシンボ

ルであるといった認識も強まっていくだろう。

高円寺で大きく発展してきた阿波おどりを中心に、まちを盛り上げる取り組みが進められている。阿波おどりは非日常の１度きりではなく、日常でたくさん高円寺に足を運んでもらえるような企画が増え、まちの人にとっても日常的に身近な存在となっているのではないだろうか。

トランスボックスアート（筆者撮影）

◆小括

以上で見てきたように、高円寺で阿波おどりがスタートした直後は青年部が町おこしのために活動しており、本場徳島との交流が盛んになるにつれて振興協会や連協会が発足して運営主体となった。さらに、ボランティアチームが結成されて高円寺の住民や外部の人々が協力し、祭のサポート側として関わるようになっていった。阿波おどりは高円寺の商店街に留まらず、各地・各国へと活動の幅を広げており、様々な地域間での交流も盛んである。

また、当初の阿波おどりの目的は商店街振興であったが、技術や魅せ方を競い合う芸能へ進化し、行政を通じて友好使節や福祉活動という側面も持ち合わせるなど、多方面へと発展している。しかしながら、非日常の祭が、日常の目的である地域活性化を達成するための手段としてではなく、芸能として技を磨きながら楽しむという別の目的にすり替わってしまっているようにも捉えられる。

他方、静かな環境を求める住民とはトラブルにもなっており、商店街のテナント化も進行している。新たに出てきたこれらの課題に対して、振興協会のNPO法人化やボランティアの学生のアイディアを生かした取り組みなど、様々なアプローチを試みている。高円寺のまちで祭を行う以上、地域住民の存在は欠かすことができない。少しずつではあるが、問題に直面する度に日常へと立ち返り、非日常の祭のあり方を修正しているのではないだろうか。

現在、阿波おどりだけでなく、そこから発展させて日常的にも集客が見込めるような企画

を行っている。高円寺内外の人にも「高円寺といったら阿波おどり」というように印象づけられ、シンボルとしての認識が強くなっている。

次章では、地域住民の存在を念頭に置きながらも、外部へとつながりを広げていく阿波おどりの様子を探っていく。

注

(5)高円寺に居住はしていないが、商業活動をするために高円寺の商店街にやってくる商業者を指す。

(6)「高円寺フェス」には約 200 店舗が参加し、無料しりとりスタンプラリーや駅前プロレスなどが行われる。「高円寺演芸まつり」では高円寺に住んでいる若手芸人を集め、まちの店を寄席として芸を披露している。「高円寺びっくり大道芸」には国内外 40 組以上のパフォーマーが集まり、ジャグリング・パントマイム・空中ブランコなど様々な技を魅せる。

(7)トランスボックスは、街中の電線類を地中化するための装置であり、配電用の地上機器の通称である。

第３章　外へ広がる高円寺阿波おどり

３－１　高円寺阿波おどりから広がるつながり

◆小中学校とのつながり

振興協会の事務局長である冨澤武幸氏は、6 年前に高円寺のとある小学校の先生から依頼を受け、子どもたちの前で阿波おどりの実状を話す機会があった。当時、子どもたちに阿波おどりの印象を聞くと、「まちが汚れる」「うるさい」など否定的な意見が多かった。しかし、それは保護者や周囲の大人の意見であり、実のところ子どもたちは阿波おどりが好きであった。そのことに気付いた先生がどうにかしようと連絡をしたのが、子どもたちによる阿波おどりボランティアの始まりであった。以後、小中学生が元々活動していた大学生チームと連携し、ゴミの収集などをボランティアとして手伝うようになった。子どもたちがなかなか阿波おどりに関われなかった理由として、参加するには連に加入して踊り子になる道しかなかったことが挙げられる。大勢の前で踊るには恥ずかしさがあったり、塾や習い事で忙しく練習する時間がなかったりと、子どもにとってはハードルが高いものであった。ボランティアでサポートする側として参加できるようになったことで、阿波おどりへの関わり方は選択の幅が広がったのである。

こうして子どもたちが阿波おどりに参加するようになると、保護者や周囲の大人たちの意見も変わってくる。子どもが一生懸命に活動している様子を見て、阿波おどりに賛同する人が増えたのである。子どもを巻き込むことで、その親や祖父母も一緒になってついてくる。阿波おどりに対するクレームは、昔に比べて 1 割ほどにも減ったという。今では、高円寺にある杉並第四小学校、杉並第八小学校、杉並第六小学校、馬橋小学校、高円寺中学校の 5 校がボランティアとして毎年参加している。

冨澤氏が最初に子どもたちの前で話をした際、「高円寺に生まれたからには一度は踊ってほしい、難しいなら実行委員として一緒に阿波おどりに参加してみないか」という言い方をしたそうだ。この発言からも、阿波おどりが高円寺にとって象徴的な意味を持っていることに気が付く。また、子どもたちが阿波おどりに関わる機会を得ることで、幼い頃より地元に対する愛着心が芽生えてくるのではないだろうか。祭の運営側にとっては願ったり叶ったりだが、子どもたちの様子を見た周囲の大人たちが、阿波おどりの否定的な側面ばかりでなく良い面にも目を向け始めたことで、まちの意識も変わり出した。

◆商店街とのつながり

前述したが、現在は商店街のテナント化が進行している。昔は商店街の店の 9 割が居住者であったが、現在は 8 割以上がテナントとなっている。店長には裁量がなく、会費を納める必要がある商店街の会員にはなりにくい。そのため、商店街全域でのコラボレーションとい

った企画を行うことは難しくなっている。現在は店に一本付け[8]という形で、居酒屋ツアーや古着屋ファッションツアーなどに参加してもらえるように交渉をしているのである。

このような難しい状況ではあるが、高円寺の商店街は皆「阿波おどり」一色で協力関係を築いている。隣接する行政単位や商店街はライバル関係になることが多いが、振興協会の理事会には商店街や町会の代表者が集い、仲良く進めている。「阿波おどり」という、高円寺のまち全体が掲げる象徴があることで、まちが一体となりえたのではないだろうか。

高円寺阿波おどり当日のまちの様子（筆者撮影）

◆行政とのつながり

高円寺で阿波おどりを運営する上で、行政との関係は切っても切れない。杉並区は高円寺阿波おどりにおいて、以前は「後援」であったが現在は「共催」である。一時期は、後援なのに区の施設を無償で借りているのはおかしいという話から名ばかりの「共催」に変更された。しかしながら、今では杉並区でも観光といったら阿波おどりという認識になり、支援が深化している。

杉並区では、観光の目的として「『にぎわい・商機』の創出」を掲げている[9]。にぎわいが増えることで、消費が増え、商機が増える。すると、またにぎわいが増える。この循環サイクルを加速させるためのツールとして「観光」を位置付ける。つまり、魅力の発信（観光）を行うことで来街者の呼び込みにつながり、にぎわいが増える、という先の循環の加速要因である。観光事業は商業振興や地域経済活性化を促進する要因にもなり、他の様々な取り組みとの相乗効果によって「にぎわい・商機」を生み出していく。また、杉並区はシティプロモーション[10]の一部として観光を捉えている。というのも、「観光」の取り組みは、人々が「訪れたい」と思うまちに主眼を置くものであるが、「訪れる」ことがその先の「住みたい」につながるものであるからだ。区外から交流人口を増やし、それから定住人口の増加につなげていこうという考え方である。

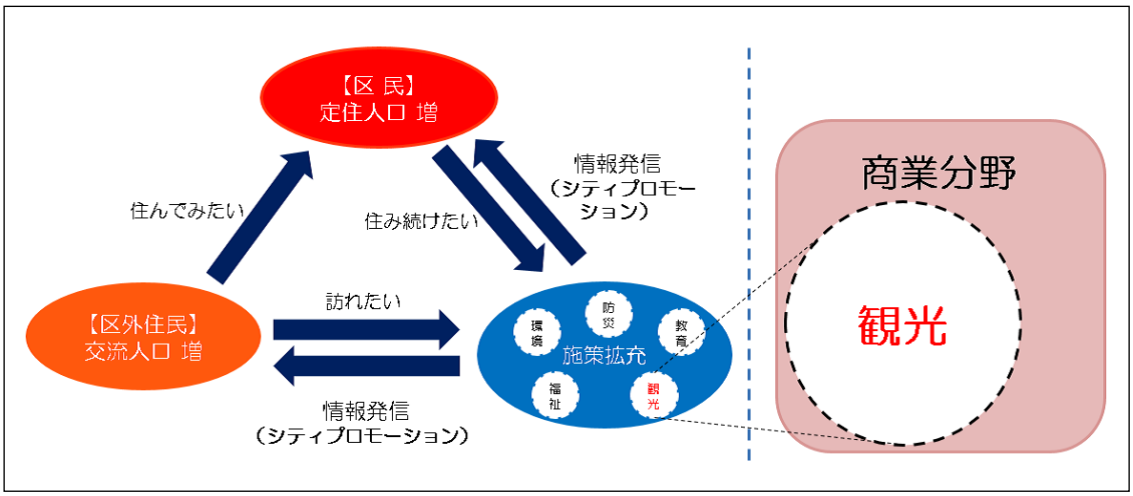


図３　シティプロモーション（杉並区産業振興センター）

杉並区の産業振興計画や観光事業の資料には必ずと言っていいほど「高円寺阿波おどり」の文字が見られる。区としても阿波おどりを重要な観光資源と捉えている証拠である。具体的な例を挙げると、「杉並体験ツアー事業」の中では、訪日外国人旅行者を含む観光客に向けた「阿波おどり体験」を実施している。このように、区では「既存の資源を活かした取り組み」とそれを発信する「情報発信業務」に基軸を置いて観光事業を展開している。非日常の祭を、区全体の活性化のための手段として捉え、区外の人々が日常的に訪れ、最終的には区に住んでもらうことを想定している。さらに、区内の人々に対しては、「住み続けたい」と思ってもらえるようなまちづくりとして「阿波おどり」を活用している。

◆他地域とのつながり

阿波おどりに特徴的なのは、連があり、その中の踊り子がチームを組んで踊るところである。1957 年当初は、高円寺の人が 30 人体制で連を作り、踊り子を始めた。現在、高円寺阿波おどり連協会に所属する連は 31 連であり、高円寺の踊り子は約 3500 人いる。一方、外部から踊りに来る人は 1 日に約 5800 人おり、連に加入している人は、職業・住居分布・年齢構成もばらばらである。そのような構成からも分かるように、連をサークル活動のように思って集まってくる人が多いのではないか。職場では終身雇用が崩れ、拠り所としての会社の存在が弱まった。日常生活においては何の利害関係もなく、ただ踊って仲間とおいしくお酒が飲めるから集まってくるのだろう。

参加している連の構成を詳しく見ていくと、実に様々なところから集まってきている。杉並区の職員による同好会（さざんか連）があり、他にも新宿区、板橋区、大田区役所も職員の連が存在する。また、前章でも述べたように、阿波おどりは高円寺から神楽坂、三鷹、大塚などへ広がり、さらに東京を中心に千葉、埼玉、神奈川、群馬、栃木、茨城など全国 47 か所で連が生まれた。本場徳島の有名連とは、高円寺の連との姉妹関係を結び、現在も技術を吸収している。徳島から習ってきたものを東京近郊に教え、自らも進化していく。高円寺

は阿波おどりの東京本部といっても過言ではない。

◆他のイベント団体とのつながり

高円寺阿波おどりが観客を大勢集め、マスコミをにぎわせたことで、他の地域からも注目されるようになった。その 1 つに「中野エイサー祭り」がある。10 年経っても地元になかなか根付かないということで、中野から高円寺に相談を持ち掛けた。そこで、振興協会が行っている資金集めの方法、地域の合意形成、行政との連携、補助金申請など、行事のノウハウをアドバイスした。

また、2011 年の東日本大震災をきっかけに、他の祭とも連携し情報交換をするようになる。震災後の自粛ムードで東京の祭は次々と中止になった。その際に他の地域と連絡を取りながら、高円寺阿波おどりの実施の有無を検討したのである[(11)]。それ以降も日常的な活動や課題などを共有し、運営に活かすようになった。連携しているイベントとしては、「新宿エイサーまつり」、「浅草サンバカーニバル」、「原宿スーパーよさこい」などがあるが、そこでは代理店が運営しており、高円寺阿波おどりのようにまちの人が運営する事例は特殊であることが発覚した。

◆踊り子によるつながり

振興協会が地域活性化事業を進める際に、「踊り子」の存在が大きな力となることがある。前章で述べた「まちなかアートデザインコンテスト」の例を挙げる。トランスボックスにデザインを施すにあたって、トランスボックスを管轄する東京電力との協力は不可欠であった。東京電力には、高円寺阿波おどりに参加している踊り子の 1 人が勤めており、振興協会からその踊り子に計画を持ち掛けた。原発事故以来のイメージを払拭したい東京電力は、地域の人のためになる事業への関与を好機と捉え、喜んで引き受けた。

このように、踊り子が橋渡し役となり、スムーズに計画を進めることができた。多様なところから集まってくる踊り子は、裏を返せば、多様なところに散らばっているのである。散らばっている踊り子たちは、それぞれに得意分野を持っている。そうした踊り子の手を借りることで、様々な場面において協力を仰ぎ、活動の幅を広げていくことができるのだろう。

◆小括

以上のように、NPO 法人である振興協会の事務局が主体となり、杉並区の後押しも受けながら、高円寺阿波おどりを通じて日常的な魅力の発信を行っている。小規模の事務局には周りに声をかけるほどの余裕はないが、「来るもの拒まず」の精神で様々なところへつながりを広げていっている。また、踊り子たちが多様な場所に散らばっていることで、新しい事業を始める際にもスムーズに話を進められることが多い。つながりが増えることで、阿波おどりを肯定的に捉える人が増え、さらにまちのシンボル化が強まっていく。

外側へと広がり続ける阿波おどりだが、一番根底にあるのは「地元の人の満足度」であり、

高円寺で暮らす人々と商売をする人々の両方の存在を大事にしている。地域住民が阿波おどりに対して誇りに思い、どんな形であれ参加することで、地域社会とのつながりや一体感を持つことができる。こうしたつながりから地域社会が活性化していくのではないか。

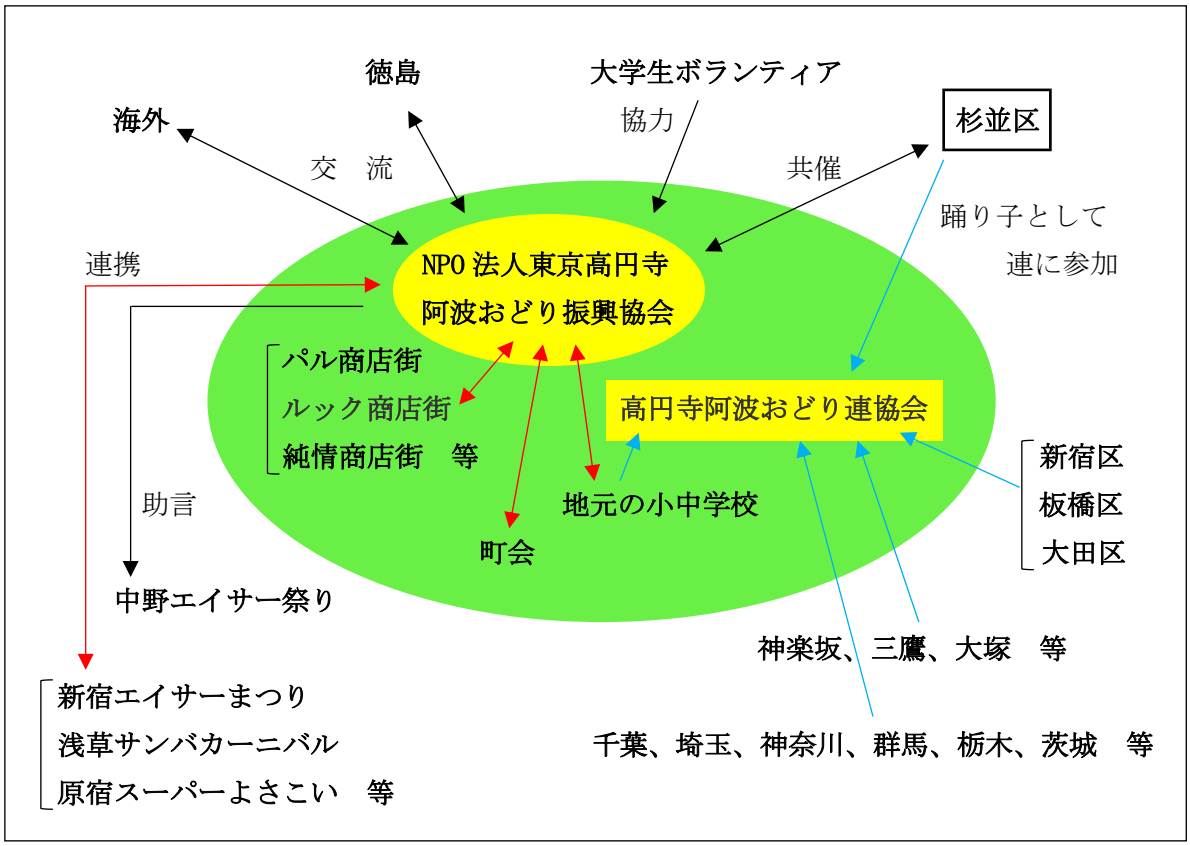


図４　高円寺阿波おどり関係図（筆者作成）

３－２　高円寺阿波おどりの発展要因

◆阿波おどりの特異性

（１）阿波おどり

阿波おどりの特徴[12]として、通りを踊りながら練り歩くだけで見栄えも活気もあって面白い、ということが挙げられる。東日本で広く行われている阿波おどりだが、その多くは、街道沿いの商店街が活性化のためのイベントを計画した際、選んだ空間が「道」であったのだ。商店街はどこも道に面しているため、道ににぎわいをつくることが活性化の要件である。お金は掛からず、踊りは簡単なこともあり、道で盛り上がれる「阿波おどり」が選ばれた。

また、阿波おどりは見るものであると同時にするものであり、「踊らにゃ損損」という囃子言葉があるように、自分で踊ることに醍醐味がある。「する」祭には、「見る」人々と一体となって興奮する楽しみがある。「見る」人々もその気さえあれば「する」人々の輪に入ることができる。「する」人々が「見る」人々といつでも交替できるのである。第１章で述べた「祭の構成要素」②瞠目性の話と密接に関係している。さらに、参加することによって初めて味わうことのできる競い合いの楽しみもある。複数の連が存在すれば、自然とその愛殿優劣が話題になる。祭は競い合ってこそ面白くなるものである。

次に、踊りの形態の柔軟性に注目したい。徳島阿波おどりから遡ると、踊りのスタイルからリズムやテンポ、衣装や楽器に至るまで、どのようにでも時代にマッチして多様に変化している。それは、踊りが非常に簡単な動作から成り立っているからである。容易に誰でも踊れる一方で、個人の体格や資質と結びついて美しさが創り出されるものであるから、やればやるほど難しくなる。本場の踊りを極めるために「阿波踊り留学」へ行った高円寺の人々は、このような阿波おどりの魅力にとりつかれたのだろう。

阿波おどりは地域性を強調しない、といった特徴もある。踊りの形態が変幻自在に変わるだけでなく、周囲の状況とも非常に馴染みやすい。どのまちでも風景に溶け込み、他のまちの祭にすり替わってしまうため、その意味では個性が育ちにくいかもしれない。しかし、それを逆手に取れば、阿波おどりには固定した型がないために、どのようなまちの特徴にも合わせて展開していくことができるのだ。もし、祭がどこかの土地の歴史性と結びついていたら、その祭を広く開放する上では制約となるであろう。現代の都市生活の中で、居住地における地縁性は急速に薄れ、土地の歴史に結びついた伝統を語ることは居住者にとって難しくなっている。祭は、地域に閉鎖されたものから、広く様々な興味を持つ人々の間に開かれ共有されるようになってきた。日本の「伝統」の祭がもつ地域閉鎖性に対して、阿波おどりがもつ都市的な開放性が、現代の人々の心性にうまく合致したのだ。

（２）連

踊り子が集まるグループである「連」は、加入や脱退が自由で、芸能を基礎とする寄り合いであり、地縁のように固定的な諸縁からは解放されたオープンなつながりである。

現代の都市生活は、固定的な基礎集団を欠いており、孤立した個人の離散集合を繰り返す毎日から成り立っている。このような現実に適合するのは、構成体の仕組みが柔軟で、構成員の出入りは自由であり、日常生活の場での一義的な結合を持たず、特定の自発的な共同行為や特定の場での結びつきに基礎を置くような都市の祝祭行事である。その意味で、「連」を基礎とする阿波おどりは、現代都市の祝祭行事にうまく合致する要素が多い。

非日常から日常へのコミュニティの変化があるのではないかと推測していたが、むしろ現代の人々は、日常でのつながりではなく、非日常だからこそのつながりを求めて連に集まってくるのではないだろうか。少なくとも、構成がばらばらの連の踊り子たちが、日常的なコミュニティをつくっていくことは難しいと考えられる。

松平誠（2008 年）は、現在の都市の祭が「遠心力」を持って人々と結びついていると説く。祭がそれまでのように特定の氏子による生活共同の絆として役立つことはもうなく、日常生活から生まれる非日常が、断片的に生活の周辺を覆っており、その中から人々が自覚的に拾い上げて自分のものとして体験するのが祭であるとしている。

それはかつてのように強烈な非日常性ではないが、自らが選び取ることができる、日常からの脱却の瞬間である。日常のさまざまな制約を離れて、人と群れる数少ない体験の場である。

自分が気に入った催しならば、時も所も、機会も選ばない。群れた人々とも、マツリを離れれば、二度と会うことがないかもしれない。こんな関係を、私は「遠心力」と表現したのである。（松平、2008 年、23－24 頁）

祭が人々をひきつけ、非日常な祭の瞬間だけかもしれないが人々を結びつける役割を果たしている。現代の生活スタイルに適合するのは、このように非日常を非日常だけのものとして、日常には還元せずに体験する形なのではないだろうか。阿波おどりの連においては、そのような体験ができるために多くの人々が集まってくるのだと考えられる。

◆高円寺阿波おどりの特異性

（1）地域住民による運営

高円寺阿波おどりは振興協会が主体となって運営しており、代理店に運営を任せる他のイベントとは異なっている。振興協会に所属するのは実際に高円寺に住んでいる人であり、地域住民に近い立場で課題を捉え、ヒアリングも行いながら住民の意見を取り入れる際に十分に役立っていると考えられる。高円寺で日常生活を送っているからこそ、日常と非日常の関係を重視し、非日常による日常への影響を当事者として間近に捉えて検討していくことができる。

さらに、振興協会の理事会の役員は、商店街や町会の代表者が兼任していることが多い。高円寺の中のリーダーたちが集っているため、地域の課題を共有しやすく、共に阿波おどりを考える場がつくられている。こうして、高円寺内部で意見の衝突が起こることはほとんどなく、まちが一丸となって阿波おどりの発展、そして高円寺の振興に尽力することができたのだろう。

（2）祭の構成要素

ここでは、第１章の２で扱った「祭の構成要素」を振り返り、高円寺阿波おどりの特異性について考えていく。

①儀礼性

高円寺阿波おどりにおいて、踊りの所作や衣装、お囃子などは、一連の儀礼的な体系であると言える。また、徳島から指導を受けて技を吸収しているが、本場の踊りを習うという点でも、伝統に敬意を表している。

高円寺の阿波おどりは、月末にある地元の氷川神社の祭に合わせて、青年部発足記念の行事をすることになったのが始まりである。神社の祭であるからという理由で警察からの道路使用許可が得られたのだ。当時は祭というと伝統や歴史を重視していた時代であったために、儀礼性を強調することで開催にこぎつけることができたのかもしれない。

時は流れ、現在では「神」との関連は薄れているものの、本物の阿波おどりを追求する姿は今もなお残っている。

②瞠目性

祭を「見る－見せる」の関係を阿波おどりの事例に落とし込むと、「見る人」は「見せる人」である踊り子、あるいは運営をサポートする側になる可能性を秘めているということである。これは先に述べた「阿波おどりの特異性」とも関連する。例えば、高円寺を訪れ、祭を目にして阿波おどりに興味を持った人がいるとする。その人は自分も何か阿波おどりに関わりたいと思い、翌年までには連に加入しているかもしれない。そのようなことが繰り返され、見る人と見せる人の関係はどんどん変わっていく。

高円寺では、「見る人」から「する人」へ変わるきっかけを提供している。「阿波おどり体験」がその一例である。近年、観光客の志向が「モノ（消費）」から「コト（体験）」へ変化しており、旅行においてもより非日常性を求めるようになっている。

③発散性

アイデンティティの形成という点で、高円寺のシンボルとして「阿波おどり」が君臨していると言える。高円寺に存在するいくつもの商店街の仲をとりもち、地域の中で参加する人々が増えるにつれ、まち全体が一体となって取り組む祭になりつつある。

その反対として、他との競争といった面もある。元々、高円寺において商店街の青年部が阿波おどりを取り入れたのは、隣町の「七夕祭り」への対抗心であった。今となっては勝るとも劣らない勢いのある高円寺であるが、他のイベント団体との連携からも、別のまちの課題や工夫などを情報交換しており、常に異なる存在を意識しながら自らの発展に努めているのではないだろうか。

また、連における競演も挙げられる。高円寺阿波おどりは、高円寺地域だけのクローズドなイベントではない。東日本のあらゆる地域で育ったたくさんの阿波おどりが一堂に集まるオープンな競演の場である。高円寺の踊り子たちは、自分たちが習い覚えた芸能を惜しみなく関東各地に広めた。互いに技を磨き合いながら、阿波おどりを高めていったと言えるだろう。

以上の 3 要素を踏まえると、高円寺阿波おどりは非常にバランスの良い祭であると考えられる。各要素が互いに影響し合っているのである。

阿波おどりを「する人」は、阿波おどり特有の所作や衣装、楽器など、一連の体系に則って踊ることで（①儀礼性）、非日常の中で日常を離れ、解放感を覚える（③発散性）。踊りは観客を感動させ、その観客までも祭の担い手へと引き寄せていく（②瞠目性）。観客を魅了することで満足感を味わいながら、非日常の娯楽性だけでなく、芸能の探求へと向かい、本物の阿波おどりを学ぶ（①儀礼性）。

また、阿波おどりの軽快なリズムと動き（①儀礼性）に「見る人」は魅せられ、非日常の中で一体感を味わう（②瞠目性）。強く関心を寄せた人は、自らも踊り子やボランティアとして祭に参加していく（③発散性）。

このように、阿波おどりには「する人」と「見る人」の存在、さらに「見る人」から「する人」への転換（②瞠目性）がある。地域の人々と外部の人々が、それぞれ様々な形で阿波おどりに親しむことで、阿波おどりはアイデンティティとしてまちの誇りとなり、他地域や他の連と競い合いながら踊りの幅を引き上げていく（③発散性）。そして、踊りから地域の活性へとつなげていく動きが起こり、様々な活動を通して祭の担い手の輪が広がっていくのである（②瞠目性）。

高円寺阿波おどりにおいて、祭の 3 要素はそれぞれに影響し合い、祭それ自体の発展に大きな役割を果たした。祭が発展していくと、祭をまちのシンボルと捉えるようになり、ますますその発展へと取り組みを進める。こうした循環が高円寺に生まれたのである。

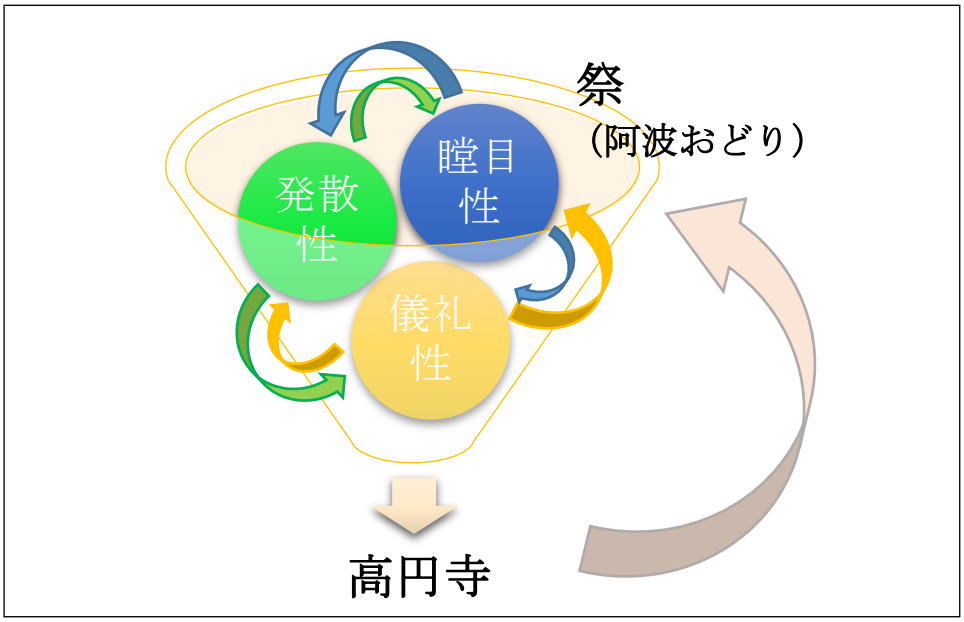


図５　高円寺と祭の 3 要素（筆者作成）

注

(8) NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会の専務理事・事務局長である冨澤武幸氏によると、高円寺で何か企画を行う場合は、商店街全域でのコラボレーションではなく、企画ごとにその趣旨に合わせて各店舗に交渉し参加を促しているという。このような方法のことを「一本付け」と話していた。

(9)杉並区産業振興センター『杉並区観光事業に関する基本的な考え方～「にぎわい」ある住宅都市をめざして～』(2017 年 2 月）を参照した。

(10)「シティプロモーション」とは、教育・環境・福祉・防災などの各分野から「住みたいまち」につながる自治体の魅力を総合的に PR して知名度向上を目指す取り組みである。

(11)2011 年にも高円寺阿波おどりを実施している。

(12)松平、1996 年、36－38 頁を参照した。

第４章　高円寺における阿波おどりの役割

高円寺において、阿波おどりは「まちのシンボル」として認識されている。非日常なものが日常における象徴となっているのである。ここでは、「日常－非日常」の関係について具体的に検討していきたい。Ⓐ日常から非日常へ向かっていく関係（日常→非日常）と、Ⓑ非日常から日常へと還元される関係（非日常→日常）と、その両方が存在していれば、「日常－非日常」は相互に影響し合っていると言えるはずだ。日常と非日常の関連性に注目しながら、高円寺（日常）における阿波おどり（非日常）の役割を考察する。

４－１　まちのアイデンティティ

◆地域住民

高円寺の人々にとって、まちを舞台に繰り広げられる一大イベントとは、どのような形であれ関係を持っている。

ここで、地域住民を居住者と商業者の２つに分けるとする。高円寺で日常生活を送る居住者にとって、まちで行われている祭は身近な存在であろう。自身やその子どもが踊り子あるいは運営をサポートする側として祭に参加していたり、観客として祭を見物しに行ったりする（Ⓐ日常→非日常）。住民同士で一緒に出掛けたり会話が盛り上がったりと、夏の風物詩として楽しんでいるだろう。時には祭がきっかけで交流が広がることもあるはずだ（Ⓑ非日常→日常）。その一方で、交通渋滞に巻き込まれてしまう人や騒音を迷惑だと感じる人もいる（Ⓑ非日常→日常）。商業者に関しては、詳しくは次の商店街の話と併せて説明を加えるが、祭と連携して企画を行い（Ⓐ日常→非日常）、客足が増えて嬉しいこともあれば、祭の最中は店に背を向けられて客が入らないこともあるだろう（Ⓑ非日常→日常）。

このように、地域住民にとって良い面も悪い面もある中で、非日常の祭は行われている。祭が行われる高円寺において、日常的に居住したり商売をしたりするにあたって、住民は阿波おどりとは切っても切れない関係となっているのだ。地域住民は、阿波おどりとの関わりに負の側面を併せ持ちながらも、日常と非日常の相互転換の中で生活を送っていると言える。そのような意味では、阿波おどりが高円寺の「シンボル」として定着しているのは確かである。

◆商店街

高円寺阿波おどりに集まる観客が増加し、世間から注目されることも多くなると、高円寺の象徴として阿波おどりを認識するようになる。そして、さらに阿波おどりを活用していこうという動きが盛んになる（Ⓐ日常→非日常）。商店街では「阿波おどり」を通して高円寺

を知ってもらい、そこから高円寺そのものの魅力（居酒屋、古着屋、芸能のまち等々）を発信していくことを目指している（Ⓑ非日常→日常）。非日常の祭が日常のシンボルとして掲げられながら、まちづくりを推進しているのだ。

また、高円寺に存在する複数の商店街は「阿波おどり」という共通の目標を持っており、協力して取り組んでいることから、一般的な同地区内の商店街同士のようにライバル関係になることはない。裏を返せば、共通の目標が生まれたことで（Ⓐ日常→非日常）、商店街各々の目玉を競って敵対することなく、連携してまち全体の発展を目指していくことができているのだ（Ⓑ非日常→日常）。このように、非日常である祭の存在によって、高円寺のまちをひとつにし、日常生活にプラスの影響を与えている事例と言える。

◆行政－杉並区

高円寺は阿波おどりをまちの「シンボル」と捉えているが、それは杉並区も同じである。区の観光政策として、さらにはシティプロモーションとして、「高円寺阿波おどり」を重要な資源として考え、活用している（Ⓐ日常→非日常）。商店街で行われる阿波おどり体験や店のツアー企画などは、「阿波おどり」を通して高円寺の魅力を知ってもらい、たくさんの人に訪れ、さらには高円寺やその周辺に住んでもらうことを念頭に置いている（Ⓑ非日常→日常）。区外からの交流人口を増やし、その先の定住人口へとつなげていく狙いである。今やターゲットは日本人だけでなく、外国人にも向けられている。

非日常の祭が、日常における地域の象徴となり、他の地域に誇れる目玉として、時に目的となり手段となり、様々な様相を呈しながら発展を続けている。

４－２　ネットワークの構築

◆地域内部の人々

地域の内部に属する人々、つまり地域住民は、どのような形であれ祭と関係を持っていると先に述べた。その関わり方は実に多様である。そして、その多様性は高円寺阿波おどりが発展するにつれて、より広がってきたのである。

元々は、連に加入している踊り子や祭を運営する商店街の役員以外は、阿波おどりの観客という立場であった。そこからだんだんと阿波おどりが有名になっていくと、まちの人から寄付金も集まるようになり、公正な資金利用のために NPO 法人としての振興協会が生まれた。さらには、阿波おどりの噂を聞きつけた徳島出身の大学生がボランティアとして運営のサポートに携わるようになり、阿波おどりに興味のある小中学生もボランティアをするようになった。

このように、阿波おどりに参加したいという思いで人々が集まり、祭の担い手が増えていった（Ⓐ日常→非日常）。このことは、祭の担い手が増加したことによって、多くの人々を

引きつけて行動に移させた、と言い換えることもできる。つまり、非日常の祭の魅力が、人々の日常の活動に影響を与えたということである（Ⓑ非日常→日常）。高円寺阿波おどりを取り巻くネットワークは、祭の担い手の増加とともに加速しながら拡大を続けている。

◆外部から集まる人々

前章では、阿波おどりの「連」をサークル活動と思って集まる人が多いと述べた。固定的な血縁・地縁などの関係に縛られることなく、自由な関係を求める現代の人々は、阿波おどりの連に引き寄せられている。さらには、連だけでなく、祭を支えることに関心を持ち、ボランティアとして集まってくる人々もいる。日常からの解放を求めて、あるいは、日常とは異なる居場所を求めて、非日常を体験しにやってくるのである（Ⓐ日常→非日常）。祭は非日常の中での瞬間的なつながりを提供しているのであり、それを日常にまで持ち込むほどの影響力はない。つまり、祭で構築されたコミュニティが、日常生活の中でも活かされていく保証はないということである。

しかしながら、それはミクロ的な視点である。確かに、非日常の中で構築されたコミュニティは、日常のコミュニティにはつながっていかないかもしれない。だが、マクロ的な視点から見ればどうだろう。阿波おどりに引き寄せられた人々が、外部から高円寺のまちに訪れる、というサイクルが日常的に構築されていると言えるのではないか。高円寺に阿波おどりが誕生して以来、本場徳島との交流や他地域への踊り指導、友好使節や福祉活動などへと活動の幅を広げ、マスコミによる注目も相まって、その名は全国へ海外へと伝わっていった。夏の風物詩として多くの人に親しまれ、祭の日には観客も踊り手も大勢集まってくる。高円寺の人々にとっての「まちのシンボル」は、外部の人々にとっても「夏のシンボル」「日本のシンボル」として認識されていると言っても過言ではない。それぞれの「シンボル」となった阿波おどりによって、高円寺を訪れ、商店街の店に立ち寄ったり、連に入って阿波おどりを踊ったり、他地域との交流ができたりと、様々な機会が提供されうる（Ⓑ非日常→日常）。それはもはや、日常的なネットワークと言って良いだろう。「高円寺阿波おどり」をネットワークの中心として、つながりの輪はますます広がりを見せている。

現代の自由な風潮の中で、「高円寺阿波おどり」は日常に刺激をもたらす１つの選択肢となっている。それを選択すると、さらに多様な関わり方（踊り子、ボランティア、観客など）の中から人々は自分に合ったものを選ぶことができる。祭との関係は自由に選択可能であり、その幅の広さも魅力である。自分に合う方法で関わりを持ち、好きなように活動することができる。このような現代人の感覚に合致している点も、つながりの拡大を促しているのだろう。

◆小括

以上のように、Ⓐ日常から非日常へ向かっていく関係（日常→非日常）と、Ⓑ非日常から

日常へと還元される関係（非日常→日常）とに分類して考察してきたが、その両方が存在していることで、「高円寺阿波おどり」は非日常の祭でありながら日常生活に密接に結びついており、「日常－非日常」は相互に影響し合っている、と言うことができるだろう。

高円寺にとって、ひいては杉並区にとって、阿波おどりは「まちのシンボル」であり、アイデンティティである。地域として誇れるものであり、まちの一体感を感じられるものである。その非日常のシンボルは、まちの活性化のための手段として、時には阿波おどり自体の発展といった目的として、様相を変えながら人々を引きつけ、日常的なネットワークを構築していく。高円寺において、阿波おどりはまちのアイデンティティ形成に寄与し、祭を中心とした多方面へのネットワークの広がりをもたらしている。

高円寺において、阿波おどりを入口としてまちの魅力の発信につなげる動きはまだまだ新しい。その意味では発展途上と言える。高円寺は、着実に交流人口を増やしながら、次の目標である定住人口の増加を目論んでいる。「阿波おどり」という大きなシンボルを手にした高円寺は、今後も発展を続けるはずだ。その発展の方向は、ネットワークの広がり方によって、いかようにも進んでいくのではないだろうか。

終章

終－１　総括

問題意識

祭（非日常）は地域コミュニティ（日常）にどんな役割を果たしているのか？

第１章　地域社会の形成と祭

◆祭の役割の変化

ムラ【神に祈り感謝する場】

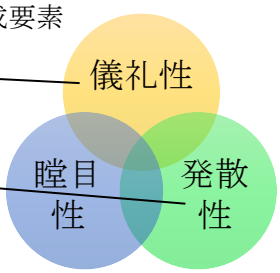
↓

マチ【共同意識を確認する場】

↓

現代都市【人々を結びつける？】

◆構成要素



高円寺阿波おどり

第２章　内から見る

◆担い手と目的の変化

・パル商店街青年部

・【商店街活性化】

↓

・連協会、振興協会誕生

・【技術や魅せ方を競い合う芸能】

↓

・【友好使節】【福祉活動】

・NPO 法人化、ボランティアの協力

・阿波おどりから【高円寺の PR】に

第３章　外へ広がる

◆発展要因

阿波おどりの特異性

・都市的な開放性

高円寺阿波おどりの特異性

・地域住民による運営

・バランスの良い祭

↓

つながり増⇒まちのシンボル化

第４章　高円寺における阿波おどりの役割

阿波おどり＝「まちのシンボル」@高円寺

【まちのアイデンティティ】

【ネットワークの構築】

⇒「日常⇔非日常」相互に影響し合っている

本論文全体の図式化　※【祭の役割】、祭の担い手を表す

◆本論文全体の振り返り

序章では、筆者の問題意識から、研究対象地の選定、調査方法、論文構成を記した。本論文は、祭（非日常）が地域コミュニティ（日常）に果たす役割を解き明かすことを目的としている。

第１章では、文献を参考にしながら、地域社会の形成における祭の役割を考えた。歴史の中で祭の役割が変化していった様子を追い、田中（2007 年）による祭の構成要素の分類を取り上げて考察し、祭と地域の関係を分析していく枠組みを得た。3 要素である①儀礼性・②瞠目性・③発散性は互いに影響し合っており、それらがバランスよく釣り合う状態が、望ましい祭のあり方であることを整理した。

第２章では、高円寺阿波おどりの歴史と現状を探った。高円寺阿波おどりは、商店街の青年部によって生まれた。祭の担い手は、青年部から振興協会や連協会、さらにはボランティアチームにまで拡大した。祭の目的は、当初の商店街振興策から、技術や魅せ方を競い合う芸能、友好使節や福祉活動など多方面へと発展していく。現在では高円寺の魅力を発信する手段として認識され、様々な企画に活用されている。

第３章では、外部へと広がる高円寺阿波おどりを見ていった。地域住民だけでなく行政、他地域の連、他のイベント団体、踊り子によるつながりなど、様々に広げていく過程を追った。そしてその発展要因を、阿波おどりの特異性と高円寺阿波おどりの特異性に分けて考察した。自由で開放的な現代都市の性格と絡めて検討し、第４章の考察へとつなげた。

第４章では、日常性と非日常性が相互に影響し合っていることを分析し、高円寺における阿波おどりの役割について考察した。高円寺阿波おどりが、まちのアイデンティティ形成に寄与していること、日常的なネットワークの構築を促していること、この 2 点を大きな役割として結論づけた。そして今後の高円寺も、阿波おどりをシンボルとして様々な方向へと発展していくだろう。

◆本論文の到達点と意義

本論文では、「地域をつなぐ祭の役割」の解明を目的として、高円寺阿波おどりを事例に研究してきた。その意義としては以下の 2 点がある。

まず 1 つは、高円寺阿波おどりの発展要因を探る際に、現代都市の性格を絡めて祭の構成要素による分析を適用した点である。高円寺阿波おどりは、その特異性から専門家の研究対象となっている。その中でも、祭の 3 要素の釣り合いという視点で考察することは価値があると考える。各要素とその関連性に注目することで、高円寺阿波おどりの要素がどのように循環しているのかを記述することができた。

2 つめとしては、高円寺（日常）における阿波おどり（非日常）の大きな役割を導き出せたことである。日常から非日常へ、非日常から日常へという 2 つの方向から分析して相互の関係性を掴み、具体的に考察した。高円寺阿波おどりがまちのシンボルとなり、日常的なネットワークの広がりをつくり出している。ここから他の地域にも言えることは、まちのシン

ボルとして何かが存在し、それを中心とした循環構造が生まれることが、まちの発展の道しるべになる、ということだ。

本論文ではマクロ的な視点からネットワークの広がりを考えた。しかしながら、当初想定していた、ミクロ的な視点である地域の中の小さなコミュニティ（学区や町会単位など）の形成やその動きにまではたどり着けなかった。最終的には、高円寺阿波おどりを中心とするミクロとマクロ両方の視点からネットワークを解き明かしたいと考えていたが、力不足であった。

終－２　謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。その方々に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

まず、ヒアリング調査に快く応じてくださった、NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会の冨澤様。インタビューの時間を設けていただいた上に、阿波おどりに関する論文の提供もしていただき、本論文において考察の枠組みとなる部分を詳しく書き進めることができました。質問以外にも、私自身の進路につながるようなお話を親身になってしてくださり、非常に嬉しく思っております。

また、本論文を執筆する際に参考にさせていただいた先輩方、私の発表に真剣に耳を傾け丁寧なコメントをしてくれた後輩の皆様、そして苦楽を共にしながら率直な意見をくれた同期の皆様。多種多様で個性的な人の多い浦野ゼミナールでの 2 年間は、勉学はもちろん、物の見方や人間性など多くのことを学ぶことができたと思っています。

最後に、本論文の構想から執筆まで熱心にご指導くださった浦野教授。私のまとまりのない発表や説明にも的確なアドバイスをいただき、良い論文に仕上げるようにと励ましてくださいました。教授の力添えなしでは、完成に至らなかったと思います。誠にありがとうございます。

本論文と向き合う中で、社会に出る前に地域社会学を学んだことは正解だったと強く感じるようになりました。ダイナミズムの中で大きく変化するまちの構造や、時間軸や空間の中で多様な角度から眺めていく手法を学べたことは、私にとって非常に大きな財産です。これからの人生においても、そうした視点を常に持ち、物事を考えていきたいと思います。

支えてくださった皆様、ありがとうございました。

参考文献／URL

NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会『「踊れ高円寺」人が創り街が育む五十年』(2006 年)
公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集 Vol.47 No.3『四都市における阿波踊りの比較から見た空間利用と運営方法の特徴と課題―徳島、高円寺、南越谷、大和をケーススタディとして―』(2012 年)
田中重好『共同性の地域社会学 祭り・雪処理・交通・災害』（2007 年、ハーベスト社）
田中重好『地域から生まれる公共性―公共性と共同性の交点―』（2010 年、ミネルヴァ書房）
松平誠『祭の文化―都市がつくる生活文化のかたち』(1983年、有斐閣)
松平誠『都市祝祭の社会学』(1990年、有斐閣)
松平誠『祭のゆくえ―都市祝祭新論』(2008 年、中央公論新社)
松平誠『東日本における阿波踊りの新展開』(1996 年、日本生活学会『生活学論叢』創刊号)
日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ『地方活性化策としての祭りの効果に関する研究－1 都 3 県の阿波おどりを移入した祭りの広がりに着目して―』(2013 年)
日本建築学会大会学術講演梗概集『地域社会形成における祭りの有効性に関する研究―阿波踊りを対象として―』(2000 年)
日本建築学会大会学術講演梗概集『非伝統的都市祝祭における空間利用の実態に関する研究　その 1　高円寺阿波おどりを事例として』(2008 年)

NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会ホームページ〈http://www.koenji-awaodori.com/〉
高円寺パル商店街ホームページ〈http://www.koenji-pal.jp/〉
杉並区ホームページ〈http://www.city.suginami.tokyo.jp/〉